

ネパール現地報告 7

メモ (主要な部分)

5月7日

NHKほっとニュース北海道の電話取材を受け、現状についてお話しする。

5月8日

カトマンズから幹線道路で約1時間半、側道に入り約30分のカブレ郡ジャムティ村の地震被害調査(側道は雨季になると使えず、徒歩でのみ到達可)。カブレ郡は首都カトマンズと今地震最大の被災地シンドパルチョークの間に位置し、この地域の村々も地震により被害を被っている。村は1戸を除き半壊しひどいものは全壊、村人はテント生活。政府から支援物資として米の支給があったばかりのため、支援物資としてダル(ネパールの食卓に必須な豆)を渡す。同時に村人の診察を行う。慢性的な病気の訴えのみ、地震によるものはなし。強い精神力からか、大きな被害にも関わらず、人々に笑顔が見られる。

5月9日

チャイルドファンドジャパン細井さんと面談。現在の活動と今後の日本からの支援の在り方を話し合う。

GFA代表ナラヤン シャルマさんと会い、追加支援の要請を受け支援金を渡す。

トリバン大学社会福祉学教授ムリゲンドラ カルキ教授と面会。

内容

震災後の心のケアのために、教授下の学生を被災した村々へ派遣すべく、学生を対象に心のケアについての指導を依頼される。

→11日にオリエンテーションを樋戸が行う。

→後日、日本から心のケアの専門家に来てもらい改めて本格的な指導をしてもらえるよう調整を約束する。

「震災発生から2週間が経過して」

救援物資(食糧)は被災地の8~9割に届いているようだ。

今後必要なものはまずテント、それと継続して食糧。

医療に関しては充足だが、必要とされるのは整形外科医と心のケア専門家。

緊急支援から生活支援へ、次のフェイズへの移行期であり、雨季も近く半壊、全壊の村々の住居の確保が急がれる。

長期的には、十分な耐震構造を持った建物をどうつくるか、日本から専門家による技術協力、また建物造営のための資金協力が求められる。